



## コロナ禍での船出

著者	豊原 法彦
雑誌名	エコノフォーラム
号	28
ページ	94-95
発行年	2022-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00030315">http://hdl.handle.net/10236/00030315</a>

2022年  
1月17日  
月曜日

豊原 法彦 経済学部長

# コロナ禍での船出

経済学部を卒業していくにあたって  
お考え頂きたいことをお伝えしよう  
と思います。

まず一つ目は皆さんは卒業されて  
社会に出ていかれますが、今までは  
お金を出して物を買うという立場で  
あったかと思えます。しかしこれか  
らは物を売る立場に変わります。同  
じものを両面で見ると、立ち位置が変  
わるとするのがすごく重要になって  
きます。要するに、利己的にひとつ  
の会社だけがよい、一人の個人だけ  
がよいというだけではなくて、全体  
がどういう風になればよい社会にな  
るのかという観点でものを見ていっ  
てもらえたらと願っております。そ  
ういう意味でダイバーシティ、様々  
な価値観、その中でどう折り合いを  
つけていくかという事が重要になり  
ますし、一つだけが正しいというこ

とはないわけですが、自分なりの信  
念があるのも事実ですから、そのゆ  
ずれないところもありつつ多様性を  
認めていくというのが重要かと思  
います。

特に皆さんこれから社会に出られ  
ますと、皆さんは所謂デジタルエイ  
ジ、デジタルネイティブと言われま  
すが、皆さんが得意な技術的なこ  
ろがどんどん進んでいきます。腕時  
計がなぜ生まれたかという有名な話  
がありますが、第一次世界大戦時に  
塹壕にいる兵士が何時何分に同時  
に突っ込む、その時にバラバラ行く  
と撃たれてしまいますから一気に行  
くと何とかなるのではないかと、時  
間を合わせて行こう、そのために腕  
時計が生まれたと言われています。ま  
たジェット機、あまりよい記憶では  
ないかもしれませんがB29が飛んで

る。高いところではゼロ戦の戦闘力が  
劣るので、与圧構造を持った飛行機  
を作れば高いところを飛べるよう  
になり、それが戦後にジェット機にな  
って皆さん平和に利用できるよう  
になったわけです。またGPSでしたら  
1990年にイランのサダムフセイン  
をアメリカ軍が攻撃した砂漠の嵐作  
戦で戦車が道のない砂漠でいた所  
に行き易いように、そして迷わない  
ようにという事で導入されました。

インターネットについては皆さん  
ご存知かもしれませんが、アメリカ  
の東海岸と西海岸の間を通信で軍事  
情報や様々な情報を伝達するのにラ  
インが一本だけだと壊されてしま  
うこともあるので、たくさんるところ  
にメッシュ状にしておけば、どこか  
詰まっても流れる、その様な形で技  
術進化してきたわけです。それだけ  
言うと血塗られた軍事と思われるか

もしませんが、重要なのはそれを  
平時にどう生かしていくかというこ  
とです。経済学で言う技術革新の  
ためのブレイクスルー、そのための  
イニシャルコストを誰が担うか、こ  
れらの場合には国や軍部が担う、と  
いうのが事実ですけども、それを  
どうにかして民生化していくのが重  
要なところだと思います。

またもう一つ重要なものとして統  
計的な見方というものを是非頭に入  
れておいていただきたいと思いま  
す。論理的には「あり得る」、「あり  
得ない」の二つしかないのですが、  
統計学的な見方をすると出来る、出  
来ないの間にどれ位だったら出来る  
かという経済用語でいう「リスクの  
見込み」というものが存在します。  
サイコロを投げて偶数がでるか、奇  
数がで続けるかという話でいえば

が、皆さん数学で学ばれたように二分の一の何乗だと言われるかもしれない。ざっくりですが二分の一の十乗が大体千分の一だということは大体サイコロを十回投げて十回連続

偶数が出る確率は千回に一回位だということ。その中で考えると全大学生の中の関学生の確率というのは、全国の大学1年生が大体60万人位いて、そのうち関学生が七千人位ですからパーセント位ということになります。そのように大体サイコロを何回投げたらそれ位かなというのをイメージし、ゼロというのは絶対あり得ないけど非常に低い。宝くじを買ったら当たる様に思います。が当たる人はまあいません。億万長者になる人はいないわけですから、そういった点でイリュージョンがあるのかなと思われるかもしれません。今から自分が意思決定する時にどれ位のリスクがあるのか、勝算があるのかと言ってもいいかもしれませんが、そののとどこをどれだけ見込むかというのが重要なかなと思います。論理的には出来る、出来ないだけども、統計学的には何パーセント出来そう、裏を返せばそうだけれども出来ないかもしれないわけです。そうだけれどもそれをどこまで見込むか、それを経済学的

に言う、「リスクの評価」ということになり。そういう事も是非頭の中に入れて行動していただけたらなと思います。

最後に。これまで色々な見方を学んでこられたかと思いますが、重要なことは「振り返る力」という事だと思えます。基本的にこれからどんなデジタル化されていきますから、今まで紙で動いていた事が全てスマホで済むような時代になっていきます。皆さんの時は少し違ったかもしれませんが、今の受験生はオンラインで入学願書を出したりします。受験票もなく全てスマホで出来る様な形も考えられている位どんどん進んでいます。その時にやはりそうではない部分、根幹的な部分をかえり見る、そのところで振り返る力、どういう風にしていこうか、何を変えてはいけないのかという事を自分なりに考える、このことが肝要です。そういう意味で今まで皆さんは小、中、高であれば文科省や教育委員会が決めた教育課程に従って学べばよく、大学であれば授業などで先生が示した皆さんの文献の中から自分で選んで学べばよかったです。これからはテキストのな

いう意味で何を学びたいのか、もっとつきつめれば自分は何をしたのか、どのような人間になりたいのか、例えば40代、50代、60代にこうなりたいから今こういう事を頑張るとい様な長期的なこともある程度視野に入れながら進んでいってほしいと思います。これも授業の中で学ばれたかと思いますが、所謂P D C Aですね。何かしたいことがあれば、それならどうすればよいかというアプローチが決まってきましたので、自分で自分を振り返る、あまり振り返り過ぎると一歩も進めなくなるのも事実ですが、やはり長期的スパンで考えてこうしたいのであればこうすればよいという視野を持ちながら時間を過ごし、その中で関西学院が少しでも役に立てること、例えばOB、OGへの様々なサービスなどもありますので、またキャンパスに遊びに来て気分を変えながら学びを深めていってほしいと思います。

学生時代の四年間、そのうちコロナという特殊な事情が二年間もあり想定外な部分もあったかと思いますが、皆さんが関西学院を卒業されたという事を感謝とともに覚えながら今後の日々を過ごして頂けたらと思います。